66　岡西為人『宋以前医籍考』の校訂出版にあたって

郭　秀　梅

順天堂大学医史学研究室協力研究員／北里大学東洋医学研究所医史学研究部客員研究員

岡西為人（1898～1973）は「医学は唯一しかないはず，道は遠くとも，それに近づくべく努力は日々続けなくではならない」（日本東亜医学協会会員記録）という抱負をもって，半世紀にわたって医学の研究を続け，一生に著作，学術論文，随筆など合わせて272篇を著した．そのうち，『宋以前医籍考』が最たる労作であり，伝統医学界の至宝である．その名声は早くも二十世紀半ばの五十年代から中国・日本だけではなく，遠くヨーロッパまで広く知られ，今日でも多大な影響を与えている．演者は近年，『宋以前医籍考』を校訂出版するにあたり，岡西為人の生涯を追跡したところ，この過程で，同氏のゆるぎない信念と精進の姿勢，および多難な経歴に感銘をうけた．よって，今回の出版あたり，「竹孫（岡西）先生半生記」，「岡西為人論文」，「岡西為人年表」，「岡西為人著作目録」，「写真集」からなる『記念岡西為人』を編集して，附録することにした．

『宋以前医籍考』の編纂は1931年に始められ，1948年に完成した．古医書1,635種，附録238種，合わせて1,873種を収録している．最初は黒田源次，日名静一と三人で編纂にあたったが，両人が中途で帰国したために，後半は岡西一人で編纂を続け，終戦後，1948年までの留任期間に原稿を訂正，浄写し，この原稿を愛弟子魏如恕に預けて引揚げた．岡西自筆稿本が中国中医科学院図書館に現存している．この原稿によって1958年，中国北京で出版，1969年台湾で重印された．北京版は伝統医学界にたちまち注目され，名医陳存仁が香港の書店に注文したうえ，岡西に報告した．ドイツの東洋医学権威オット・カルロー教授は当時留学中の大塚恭男に，その購入を依頼したが，その父大塚敬節は，日本でも「幻の名著」であり，血眼で探しているところであると返事したという．

岡西は『宋以前医籍考』の編纂に全精力を注いだ．岡西は，どの方面の研究でも文献を必要としないものはないが，漢方のように文献だけに頼るほかない部門の研究においては，文献の成立や伝来についての知識を必要とするのは当然だと，本書の必要性を強調した．

『宋以前医籍考』の書名に関して，岡西が「宋以前」と限ったのは，特別の理由からではなく，「元以降」は第二段とし，まず古いところから始めたに過ぎないと説明している．従来，『宋以前医籍考』には宋以前の医書しか著録していないと思われてきたが，実は，宋以前医書を書目として立項し，後の歴代の関連する医書も余すところなく収録している．

岡西は17歳から49歳まで中国での34年間，戦争の凄惨さを見聞した．モンゴルへ調査旅行中には，蒙軍に抑留され，危険な状態に追い込まれた．戦乱で収入もなく，売り食いで生活をしのぎ，また，両親・兄弟・親友の死にも遭遇した．にもかかわらず，仕事に対する情熱は少しも衰えず，動揺することもなく研究に専念し，優れた業績を多く残した．これは彼の平常心，冷静に現実に直面する穏やかな人柄，堅忍な人格と，妻と三人の子供の温かい家庭に支えられたものであった．これに対して，岡西は心から感謝し，惜しまず支援してくれた大谷光瑞，恩師久保田晴光，愛妻の光子の三人の「光」字をとって，書斎を「三光庵」と名付けた．

このたび，『宋以前医籍考』を校訂出版するにあたり，岡西の遺族を訪ね，遺書，原稿，アルバム，日記など遺品を拝見することができた．岡西の業績を目の前にし，胸をときめかせつつも，その辛酸の過去に想いを禁じえなかったものである．岡西が羅振玉から譲り受けた『重輯神農本草経集注』七巻を手に触れることができたことも幸であった．この書は幕末の考証医家森立之らが復元輯成した貴重な文化財である．今まで遺族によって保存されていたが，今年4月20日，次男岡西克明氏は，研究者の資料に供すべく，この書を含め，すべての遺品を京都大学人文科学研究所に寄付された．その場に立ち会った私の心にはその父岡西為人の遺風がしみわたった．